佳作

母へ

新潟県上越市立城西中学校
３年　石野　愛叶

「うるさい、死ね」。

本当は私が悪いのだ。母は私のためを思って叱ってくれただけである。それなのに私は、母に心ない言葉をぶつけてしまった。言葉だけでなく物に当たったり、実際に暴力を振るったりしたこともあった。13 歳の私は、何度も何度も母を困らせた。悲しませた。傷つけた。そのたびに母は言った。「ママは、あいちゃんを、ちゃんとした大人に育てるから。」と。

そして 14 歳。進路のことを考えていく中で、私は警察官になりたいと思うようになった。あのピシッと締まった空気感に、市民のために大変な業務もこなすかっこいい姿に、一目惚れしたのだ。そして、母を困らせてばかりの私が、人一倍正義感や思いやりの心を必要とする職を目指すことに決めた。まだ警察官になれる確証も自信もあるわけではないが、母の存在が私の背中を押してくれている。

母は、私が小さい頃から「優しさ」や「思いやり」、「正直さ」や「正義感」と大切なことを根気強く説いてくれた。正直なところ、この四つが完璧に身についたかといわれれば、そうではない。誰も得のしない嘘をつき、人が見ていなければ完全に気を抜いて生活することを、ずっと続けてきたのだ。だから急に直すのはとても大変だ。しかし、今のままの自分ではダメだと思い、頑張り始めた。少しずつ自分が変わってきていることも自覚している。

そんな自分に対して、小さなことでも褒めてくれる母。中学３年最初の三者面談で、担任の先生に、私の頑張りを褒めてくれた。そのことがとても嬉しかった。母が褒めてくれたことは私のモチベーションや自信となり、今も頑張る原動力となっている。何より「自分を変えなくては」と思うことができたのは、母の言葉があったからだ。どんなことよりも、ちゃんとした大人になることに目を向け、一生懸命育ててくれている母に感謝が堪えない。

また、母は、どんなことでも応援し支えてくれる。漢字や英語検定への挑戦、１年生の時に生徒会副会長の立候補も応援してくれた。そして、現在行っている生活委員長の仕事もそうだ。きっとこれから待っている高校受験、夢や目標も、一緒に悩み、考え、すぐそばで支えてくれるだろう。

私はもともと、いろいろなことに挑戦できるタイプではあったが、どこかで弱気になったり、途中で諦めたりするところがあった。しかし、「あいちゃんな

らいけるよ」という母の前向きな言葉に何度も背中を押してもらってきた。委員会の説明がうまくいかない、体育祭の活動がうまく進まない。３年生になって約半年、うまくいかないことはいくつもあった。しかし、簡単に投げ出すわけにはいかないので、試行錯誤を積み重ねてきた。母が与えてくれた新しい視点で再度考え直してみたり、反省や改善を丁寧に行ったり。そうすると物事が順調に進むようになってきた。一度うまくいった体験をすると、また頑張れるものだ。最終目標の達成や物事の成功に向けて、粘り強く取り組めるようになってきた。これも母が背中を押してくれたおかげだ。

小学校の頃に野球に出会わせてくれたこともそうだ。三振して試合で負け、悔し涙を流したこともあれば、試合で一つも取ることができなかったフライを、初めてグローブに収めて、嬉し泣きしたこともあった。野球を通して声を出すことを学び、呼びかけやあいさつなど、必要な声が出せるようになったことは、私にプラスになっている。涙が出るほど本気になれる経験というのは、野球が初めてだった。いつも自分に甘く、つらい方を選んでこなかった私。野球を通して「一生懸命」とはどんなことであるかを知り、一生懸命やることの楽しさを学ぶことができた。野球での素敵な体験ができたのも母のおかげである。

２年前の私は、嘘や暴言暴力を繰り返し、門限など小さな約束さえも守れなかった。家族や友達、自分の大好きなものを大切にできていなかった。でも、今は違う。冷静に善悪の判断をした上で行動することが多くなり、母に正直に話をできることがすごく増えた。また、家族といる時間が楽しく感じられ、家族が大切だと思えるようになった。いい友達と、いい関係が築けるようになった。母に落ち着く時間をもらって、自分の大切なものについて見つめ直し、より大切にできるようになった。今は母が私を変えてくれたように、私も誰かのために手助けしたい。

将来は、警察官になる。人の気持ちに寄り添い、誰もがまっすぐに生きられる社会を目指したい。

「強くて優しい警察官になります。」

ママいつもありがとう。